

1. 文学部、文学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 5)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 研究科全体を通じて着実に著書・論文による研究成果の公開が進んでいる。特に研究の最先端を報告する査読付き論文では、外国語による論文の数が日本語による論文を大きく上回っており、国際的な研究成果の発信が強く意識されていることがわかる。またこの点は、外国語で書かれた著書の数が増加していることから明らかで、中でも外国語による単著の出版点数が増えていることは注目に値する。比較的長期にわたる研究の蓄積をまとまった形で外国語で公表し、国際的な貢献につなげていく動きが着実に加速していると言える。

〔特色ある点〕

- 平成 31 年 4 月には文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）と文化財総合研究センターの再編・統合を実現し、文化遺産学・人文知連携センター（CESCHI）の設立に至った。この組織再編は、人文学の多分野を横断する研究の可能性を大きく広げることを目的とする。すでに令和元年 9 月には設立を記念するシンポジウム「文化遺産でつなぐ人文知—京都からユーラシア世界へ、原始から未来へ—」を開催（参加者数 70 名）し、新たなネットワークを活かした研究活動を本格的に始動している。
- 平成 29 年に文部科学省から「指定国立大学法人」の指定を受けたことを踏まえて、文学研究科、人間・環境学研究科、人文科学研究所の 3 部局が協議を行い、平成 30 年度より新たに京都大学人文学連携研究者制度を設けた。本制度は、研究科の教員が人文・社会科学に携わる研究者を幅広く研究者として受け入れる制度で、研究ネットワークの裾野を広げるとともに、人文学研究を推進することを目的とする。平成 30 年度には 4 名、令和元年度には 3 名を受け入れた。共同研究のテーマは、「自己に関する哲学・哲学史的研究」「現代アフリカ社会におけるレイシズムとコロニアリズムの表象—ローズ像・ガンジー像の撤去運動から」など多様で、いずれの研究においても文学研究科教員と連携研究者が繰り返し討議を行いながら研究を進めることで共同研究の効果を最大化する取り組みを行っている。その成果の一部はすでに、国内外の学会での口頭発表、論文の執筆、著書の刊行等につながっている。

- 文学研究科の教員の多くが文化館・博物館・美術館等との連携による研究活動を行ってきた。第3期中期目標期間中の文学研究科としての新たな進展としては、平成29年度に京都府立京都学・歴彩館と覚書を交わし、京都大学大学院文学研究科から歴彩館へ外国人若手研究者を推薦し歴彩館がこれを受け入れる体制を整備し、研究交流を開始したことを挙げるができる。
- 外国人研究者（招聘研究員・招聘外国人学者・外国人共同研究者）を世界各地から多数受け入れ、共同研究を推進している。その受入数は、平成28年度は31名であったが、平成29年度は49名、平成30年度は62名、令和元年度は53名となっており、若干の上げ下げはあるものの、全体としては増加している。国際的な共同研究が着実に進展していることがわかる。

またこれと連動する形で、文学研究科の教員が主催者の一人となって海外の研究者と連携し、国内外での国際研究集会や国際シンポジウムを開催する動きも進んでいる。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、8件、5件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。